三代日本主義の系譜について

松田福松

序

文化は交通によって開展し、一国の独自性（National Identity）の自覚は異なった文化伝統をもつ異国との交流に触発されて目覚めしめられる。これは個人と個人の場合にも等しく言へることで、自閉症の児童は決して正常の人間的発達をとげることが難かしいのである。異なった人格と交渉し、異なった文化伝統をもつ他国と交流を深めてこそ、そこに個人としても国家・民族としても進歩発展の契機に恵まれるのである。

我国においても、朝鮮を経て伝来した燦然たる大陸文化に接してはじめて己が独自の国体を自覚せしめられるに至ったのであった。それは幕末明治以来今日に至る西洋近代文明の巨浪の侵迫に際し、よくその圧倒的の勢力に耐へてその精華を摂取し東西両文明の綜合的創造者として日本独自の面目を独立国家の勢威に顕示せしめた根本の底力ともなった。この我国近代国家体制の骨組みとなった「大日本帝国憲法」の制定に当り、その原案の起草に畢生の力を傾けつくした井上毅（一八四四—九六）は、その著「梧陰存稿」巻一（一八九五刊）の中に「人に自尊自卑の性あるの説」

と題し、

「人類の万物の霊たる証徴として其の固有の高尚なる性質として人々自尊の天性あらざるはなく、其の自尊の天性あると同時に亦自卑の反動の天性を有せざるはあらず。自卑の性は人々自ら己れの欠点あることを感触するの霊覚にして即ち謙徳とも称ふべく、総ての好学進歩の要素たるものなり。此の天性の映照する所として又人々自ら己れの生活する社会の不足なることを感じ一転して他に至善円満の人類と至善円満の社会あることを想像するに至る」(1)

とし、支那人は「上古」に黄金世界を求め、印度人は「冥界」に之を求め、近世の哲学者は進化の「未来」に之を求め、更に

「近く我が国の史籍を観るに、古へ淳朴の民、風気漸く開けむとする機に際会し、一朝隋唐の文学仏法とともに輸入せしかば、一国を挙げて異常の賛嘆を以て之を迎へ一二聰明の人之を唱導して万衆雷同し其の勢恰かも決流のごとく、殆んど己れの国あることを忘れて、文学政治風俗百般の人事は皆、海を隔てし西土に模倣して之に髣髴たらむことを希望したり。此の時の人の思想は、国語国文を廃して往く往くは全くの漢語漢文に変化せむことを試みたりしが如し」(2)

といふ有様で、わが国が大陸文化と交流せしはじめ、いかに一世を挙げてこれに心酔し、そこに黄金世界を仰ぎ求めたかを指摘して居る。

しかしこの一世を風靡する大陸文化の横流の中に立って、よくその思想学術を博綜し、日本人としての信仰体験によってこれを批判摂取し、新たなる日本文化創業の基を開く未曽有の大事業をなしとげられたのが聖徳太子、ウマヤドノトヨトミミノミコ（五七四―六二二）であり、その現しき証しは太子制定の「十七条憲法」とわが国最古の権威ある著作となった太子親草の「三経義疏」である。それらは外形的には儒教仏教の語を用ゐつつ、内容的には太子独自の体験に基づく信の告白であって、「法華義疏」の題号下には「大委国上宮王私集、非海彼方本」とわざわざ注記せられて居る。

かくて、推古天皇一四年、太子自ら御母天皇のために宮中講経の挙ありし翌年には、

「我皇祖天皇等宰世也、跼天蹐地、敦礼神祇、周祠山川、幽通乾坤、是以陰陽開和、造化共調。今当朕世、祭祀神祇、豈有怠乎。故群臣為竭心、宜拝神祇。」(3)

との詔あり、太子及び大臣百僚を率ゐて神祇を祭拝し給うたのであって、そこには神代ながらのアマツノリトノ・フトノリトゴトの奏せられたことは勿論であったらう。

また同年、小野妹子を大唐に差遣し、大陸との直接交流の道を開かせられ、翌年唐客来朝し、その帰国に当っては太子自ら筆をとってあの有名な「東天皇敬白西皇帝」云々に始まる隋帝への返書を草せられた。後世江戸時代に及び、「中朝事実」を著はして日本的自覚を力強く宣明した山鹿甚五左衛門（一六二二—八五）は、太子の歴史的業績を追想して、その自伝「配所残筆」の中に「上古に聖徳太子ひとり異朝を貴ばず、本朝之為二本朝一事をしれり」と賛し、シキシマノヤマトゴコロに立って「漢籍意（カラブミゴコロ）」を厳しく批判した本居宣長（一七三〇—一八〇一）も、その「内外のわきまへ」を明辨した「馭戎慨言」上之巻上の中に「されど猶かの王をただに皇帝とはのたまはず、東にむかへて西とのたまひ、こなたにはた倭とも王共あらため給はで、猶天皇とのたまへるにて、かの王が書に倭王と申せるゐやなさをにくみて、それにはしたがひ給はざりしほどしられたり」と明確な認識を示して居る。

更に太子薨去の前年には、天皇記・国記・臣連伴造国造八十部並びに公民等の本記を纂録せしめられ、我国の民族的伝統の由来を明らかにせられた。不幸にして是らの大部分は蘇我入鹿の乱に焼失したが、我国修史の先駆として後の「古事記」（七一二）「日本書紀」（七二〇）の成立を導くこととなった。

「古事記」は我国太古以来「貴賤老少、口口相伝」し来ったカムゴト・アマガタリを、天武天皇（六三二—八六）が口づから稗田阿礼に口誦伝授し給うた「勅語旧辞」であって、我国固有の古伝を漢字漢文の形式を仮りつつ我国固有

の古語の格さながらに撰録せむと試みたものであり、「日本書紀」は我国書伝の根本たるヒオキ・フビトの書紀し伝来した諸家の記録を天武・持統・文武・元明・元正の五代（六七三―七二一）に亘って蒐集修撰せしめられた純漢文体の国史であるが、百首に余る歌謡類その他翻訳不可能の古語の類は全てそのまま漢字の音韻に写して伝へられて居ることは「古事記」に準ずる。

これらは、更に数十年後に成立した我国最古の歌集「万葉集」と共に、古語の宝庫であり、「いそのかみふるごとぶみは万代もさかゆく国のたからなりけり」と明治天皇が御製あらせ給うた通り、イタリアのダンテ（一二六五―一三二一）、イギリスのウィクリフ（一三二五―八四）、ドイツのルター（一四八三―一五四六）が各自その国語的業績を通して自国の文化形成に至大の影響を残した如く、当時大陸文化の圧倒的漲流の中にあって、日本民族固有の伝承を明らかにし、殊にその「神代」の巻は我国独自の悠遠なる国家成立の由来を壮大な神話的背景の裡に描いて永くわが国民精神の根幹支柱となった。

やがて王朝の輝き薄れ武家の世となって後も、建武中興の功臣・南朝の柱石たりし北畠親房（一二九三―一三五四）の「神皇正統記」は、その冒頭に――

「大日本は神国なり。天祖始めて基を開き、日神長く統を伝へ給ふ。我国のみ此事あり。異朝には其類無し。此故に神国といふなり。」

と極めて簡明にわが国体の独を宣言し、また更に幕政六百年の終末、長州藩山鹿兵学師範の家を嗣ぎ、黒船来航に触発された国政一新の激動に際し、文字通り血の最後の一滴までその忠誠を君国にささげつくし、「討れたる吾をあはれと見む人は君をあがめて夷払へよ」と明治維新の大眼目「尊王攘夷」の志をその永訣の書「留魂録」にとどめた二十一回猛士吉田寅次郎（一八三〇―五九）も、その刑死十六日前の獄中書簡に――

皇神の誓ひおきたる国なれば正しき道のいかで絶ゆべき
道守る人も時には埋もれどもみちしたえねばあらはれもせめ

と、その生死を超ゆる「国体の信」「日本真男児」の魂を表白して、我国固有の伝承の不滅の生命を実証して居る。

1　国粋保存主義

僧契沖（一六四〇―一七〇一）の「万葉代匠記」より本居宣長（一七三〇―一八〇一）の「古事記伝」に至る国学の勃興は、千年を隔てた我国古典の内容を国民一般の所有たらしめ、水戸彰考館編集の「大日本史」（一六五七～）・山鹿素行の「中朝事実」（一六六一）・頼山陽の「日本外史」（一八二七）等、漢文による国史の闡明と相まって、「尊王攘夷」「神武復古」をスローガンとする明治維新の思想的基盤を築いたのであるが、明治十年（一八七七）西南役終了、明治新政府の基礎確立せられ、その「開国進取」政策が全国的規模に推進せらるるに及び、時運はここに急転回し、西欧文物の怒涛の如き流入と共に世を挙げて「文明開化」「脱亜入欧」の呼び声に風靡せらるるに至った。即ち鹿鳴館（一八八三）に象徴せられる欧化万能時代の到来である。旧来の陋習を破り智識を世界に求めむとするは、「五箇条の御誓文」にも明かなる維新の国是であり、社会進歩の一階梯であるが、政府の散髪脱刀令（一八七一）に続いて廃刀令（一八七六）ひとたび降るや、曾って「武士の魂」として貴重せられた天下の至宝「日本刀」も二束三文に抛却せられ、「多くは紅毛奴の手に渡りて其玩弄物となれり。日本刀を抛却せしは則ち日本国の半身を断って不具とならしめたるなり。元気の衰廃する亦宜ならずや。ああ日本刀既に紅毛奴の玩弄物となる。日本国も亦竟に紅毛奴の玩弄物たるべきか」と慨嘆せらるる世相を呈するに至っては、苟くも心ある者、ただ黙して止む能はざるものがあらう。

果してここに「国粋保存主義」の大旗をかかげて全国民に呼びかくる力強い声が起った。しかもそれは明治以後の

新教育の門をくぐった青年たちの確信に満ちた声であった。即ち大学南校を出てイギリスに留学し「理学宗」を唱へた杉浦重剛（一八五五―一九二四）、内村鑑三や新渡戸稲造につづいて札幌農学校を出た地理学専攻の若い実学者志賀重昂（一八六三―一九二七）らが明治廿一年（一八八八）に組織した「政教社」の運動であって、それはこれと相前後して同志社出身の徳富猪一郎（一八六三―一九五七）が創立した「民友社」の言論活動と並んで当時の世論を大きく動かす力を持って居た。政教社からは半月刊政治評論誌「日本人」が志賀重昂を発行兼編集人として創刊されたが、彼はその創刊の「旨義を告白す」る一文の中で、彼の所謂「国粋保存旨義」を宣言して言ふ――

「日本の海島を環繞せる天文、地文、風土、気象、寒温、燥湿、地質、水陸の配置、山系、河系、動物、植物、景色等の万般なる囲外物の感化と、化学的反応と、千年万年の習慣、視聴、経歴とは、蓋し這裡に生息し這際に来往し這般を覩聞せる大和民族をして、冥々隠約の間に一種特殊なる国粋（Nationality）を叛成発達せしめたる事ならん。蓋し這般の所謂国粋なるものは、日本国土に存在する万般なる囲外物の感化と化学的反応とに適応順従し、以て胚胎し生産し、成長し発達したるものにして、且つや大和民族の間に千古万古より遺伝し来り化醇し来り、終に当代に至るまで保存しけるものにしあれば、是れが発育成長を愈々促致奨励し、以て大和民族が現在未来の間に進化改良する物の標準となし基本となすの、正しく是れ生理学の大原則に順適するものなり。斯の如くなれば、予輩が懐抱する処の大旨義は実に日本の国粋を精神となし、而して後能く機に臨みて、進退去就するにあり。……然り生物が機に臨みて変応するが如く、大和民族も亦有形に無形に均しく是れ変応せざる可からずと雖も、這般変応の標準は国粋保存に是れ帰因するは真個に打ち崩す可からざる大法律ならん。」(4)

と。そして「日本在来の旧分子を悉皆打破し、泰西の新分子を以て之と交換する」といふ「日本分子打破旨義」が「天地自然の大原則に違戻」する到底実行不能の空論であることを徴証すると共に、「泰西の開化てふ栄養物を日本国土なる身体に飲食せしめ、之を咀嚼し之を消化し以て日本国土に同化せしむるに非ずして、只管之を以て日本の外面を虚飾塗抹せんとする」者の愚を、イソップ物語中の孔雀の羽毛を飾る鴉の愚に比し――

「彼の白皙人種の一顧を購はんとし、故更に不急なる土木を興し、不生産なる事業を叛起し、虚飾是れ本領とする壮宏華麗なる建築物を新造し、無用の道路を修繕し、踏舞を勉強し、仮装舞会を奨励するてふ策略の如きは、是れ豈に『塗抹旨義』の本色に非ずして何ぞや。而して這般忌むべき怪しむべき『塗抹旨義』の為めに悲む可き憐む可き千万の蒼生が汗血を圧搾し来るの状況を倩視すれば、日本男子にして腸胃なき者はいざ知らず、苟くも些の気骨ある者をして慷慨悲愴に禁へざらしむるは抑も非なる耶。……這般後者の如き旨義は、日本国民の為め天地の公道の為め学術の真理の為めに、一秒時間も速かに之を日本国土より放逐蕩掃せんことを希望して措かざるなり。……彼『日本分子打破論』と『塗抹旨義』とは原因結果の大法律が認許せざる所のものにして、兼て這般を日本国裡に拡充伝播せば、三千八百万の蒼生が運命は真個に風前の灯の如くなるを以て、感憤自から措く能はず、乃ち起ちて『国粋保存』の大義を鋭意熱心に奨説する所以なり。」(5)

と説き、更に進んで「国粋なる胃官を以て他邦より輸入し来りたる開花を消化し同化したる実例」としてギリシア、ローマ、ドイツ、イギリスの先蹤を挙げ、「然れば日本も亦我国粋を精神となし骨髄となし、之を以て大和民族が現在未来の間に変化改良するの標準となし基本となし、而して後他の長処妙処を輸入して、ここに所謂『日本の開化』なるものを掀起するは豈に之れ一大快活の事業に非ずや」と言ひ、広く全国同胞の奮起を促し――

「起きん哉、我が三千八百万の兄弟姉妹よ。卿等は自己が現在未来の安寧幸福を保維せん為め、何ぞ自ら奮って『日本分子打破旨義』と『塗抹旨義』とを日本国外に放逐蕩掃するの方策を講究せざる。借問す其方策とは如何。曰く彼ら『日本分子打破旨義』と『塗抹旨義』とは上流社会と大先達の学士世界との間に眼前自今大団結を為し、滔々として日本国土を汎濫せんとするものなれば、卿等も亦た大団結を組成し、敢て以て這般の両党与に衝らんとする即ち是れなり。……知得せよ我が親愛なる三千八百万の兄弟姉妹よ、当代今日は実に之れ大日本国の興廃、盛衰、安危と、大和民族の隆替、進退、嚮背とを裁断すべき千歳一遇の機会なるを以て、予輩は舌の在らん限りは『国粋保存』の大義を極言極論して已まざらんとする者なり。……起きん哉三千八百万の兄弟姉妹よ、日本の大気を呼吸し、日本の井水を飲み、日本の土壌に棲息しながら、日本士女の本分を尽さず本職を為さず、恬として顧みざるものは、豈に卿等が本心に愧ぢざらんや。人生五十、酔生夢死豈に卿等が期する処ならん哉。」(6)

と、預言者的熱情を以てする訴へを以て結んで居る。

雑誌「日本人」の創刊に続き、翌廿二年（一八八九）には新聞「日本」が陸実（一八五七―一九〇七）の主宰の下に創刊せられ、明治以後の日本文芸に不滅の貢献を残した正岡常規（一八六七―一九〇二）の登場を見るのであるが、ここには細論の余地なく、ただ羯南の没後「日本人」と合併して半月刊誌「日本及日本人」となり、その我国論壇思想界に対する影響は大正時代中期にまで及んだことを注意するにとどめよう。

新聞「日本」の創刊と同年、芸州山村の神官の子、西沢之助（一八四八―一九二九）は東京に国光社を興し、機関誌「国光」を創刊した。彼が十余年間全く無名なる草莽布衣の人として全国を遍歴遊説した結果である。「国光は何の為に天下に出でたる。曰く、国光を発揚せんが為なり」に始まるその「国光論」に言ふ――

「回顧すれば吾人東奔西走、国体の尊厳を説き道義の振作を謀りしもの拾数年、今や漸く以て国光の主旨を天下に表白する機運に到達せり。世の憒々者流動もすれば内外軽重の分を誤り是非向背の途に迷ひ、往々長を取り短を補ふの名を以て我を捨て彼に従ふの実に陥り、上は文物典礼の大より下は言語文章飲食衣服の細に至るまで尽く改むる所あらんとし、甚しきは至大至重の国光を推して幽晦湮滅の域に擠さんとする者さへ鮮からざらんとす。苟も国光を扶持闡明して宇内に照徹せしめんと欲する者誰か慷慨悲憤せざらんや。……彼の滔々たる西洋心酔者は此の至大至重なる国光を以て、啻に至大至重なる国光として称揚せざるのみならず、将に国家の進歩を阻害する厄介物とし之を取り除くに孜々たらんとするに於てをや。……維新以来我が国徳風の衰退すること日一日よりも甚し。武を尚び義を重んじ廉恥節義の俗は蕩然として地を払ひ、物は浮華婬靡に流れ人は庇弱怯惰に赴き、風声鶴唳にも狼狽して却走せんとす。人を倒して利を争ふ者あれば世を挙げて才子と称し、暗夜憐を乞ひて白昼人に誇るは滔々として皆是れなり。彼の不平無頼の徒に至りては平地に波瀾を生じ水なきに舟をやり、良民を煽動して国家を傷け、天下事あれば掌を拍ち足を挙げて喜び、天下事なければ百方力を尽して禍の種を蒔き乱の階を作らんとす。此の輩の義勇公に奉ぜんことを望むは百年河清を待つよりも愚なり。我が国今日の有様は誠に此の如し。志士仁人は将に之を如何とかする。……それ国光は国家の拠りて以て建立せらるる所の基礎にして之を改革破壊するときは国も亦改革破壊せらるるなり。故に道徳も之に拠らざるべからず、政治も之に拠らざるべからず、風俗も習慣も之に離るべからず。然るに維新以来利口辯才の徒一時並び起り、多年国光中に婆娑悠遊したる民人を駆りて国光の本義と甚相容れざる教義中に投じ入れんとす。道徳何を以て滅裂せざることを得

ん。人情何を以て酷薄ならざることを得ん。風俗何を以て敗頽せざることを得ん。故に今日の急務は国光の本義を発揚して道徳の大基礎大根本を定め、着々歩を進めて弊風を匡正し頽俗を挽回するに在り。志士仁人何ぞ身を忘れ心を一にし力を協せ以て茲に従事せざる。今日の急務何物か之に若かん。」(7)

と。これを初声として爾来十有二年、日本女学校を創立して女子教育に専心努力するに至るまでに、「国光」誌上には副島種臣（一八二八―一九〇五）の「日本歴史は道徳の経典なる事を明にす」以下、勝安房、品川弥次郎、栗田寛、穂積八束その他の寄稿のほか、東久世通禧謹話による「孝明天皇御遺徳」、元田永孚（一八一八―九一）の「経筵進講草案」、副島種臣門下筆録の「蒼海先生講話」を連載して「国光の本義」の宣揚に努めた。彼はまた日本赤十字社の佐野常民（一八二三―一九〇二）らと謀って「日本赤十字」を創刊し同社の事業の全国的発展に貢献した。

元田永孚は、その「経筵進講草案」を「国光」誌に連載するに当り、毎回必ず手づから筆記した原稿を用ゐ、且つ連載の「国光」は毎号これを特製本に仕立てて宮中に献納し、乙夜の覧に入ることを無上の幸慶としたのであるが、彼は明治十一年（一八七八）明治天皇の東山、北陸、東海諸地方御巡幸後の聖旨として――

「教学ノ要、仁義忠孝ヲ明カニシテ、智識才芸ヲ究メ、以テ人道ヲ尽スハ、我祖訓国典ノ大旨、上下一般ノ教トスル所ナリ、然ルニ輓近専ラ智識才芸ノミヲ尚トビ、文明開化ノ末ニ馳セ、品行ヲ破リ、風俗ヲ傷フ者少ナカラズ、然ル所以ノ者ハ、維新ノ始、首トシテ陋習ヲ破リ智識ヲ世界ニ広ムルノ卓見ヲ以テ、一時西洋ノ所長ヲ取リ、日新ノ効ヲ奏スト雖ドモ、其流弊、忠孝ヲ後ニシ、徒ニ洋風是競フニ於テハ、将来ノ恐ルル所、終ニ君臣父子ノ大義ヲ知ラザルニ至ランモ測ル可カラズ、是我邦教学ノ本意ニ非ザル也」(8)

といふ「教学大旨」を記録し、明治十五年（一八八二）には宮内省蔵板の「幼学綱要」を編して全国に頒布せしめたが、更に明治十九年（一八八六）皇上帝国大学親閲後の「勅喩」を――

「朕過日大学ニ臨ス。（十月廿九日）設クル所ノ学科ヲ巡視スルニ、理科・化（学）科・植物科・医科・法科等ハ益々其ノ進歩

ヲ見ル可シト雖モ、主体トスル修身ノ学科ニ於テハ曾テ見ル所無シ。……国学漢儒固陋ナル者アリト雖ドモ、其固陋ナルハ其人ノ過チナリ。其道ノ本体ニ於テハ固ヨリ之ヲ皇張セザル可カラズ。……大学今見ル所ノ如クナレバ、此中ヨリ真成ノ人物ヲ育成、スルハ決シテ得難キナリ」(9)

と、その「聖喩記」に記録して居る。

この聖旨がやがて明治廿三年（一八九〇）の「教育勅語」の下賜となり、前年の「帝国憲法」の発布と相まって国論の帰趨を定め、これに先立つ「軍人勅諭」を精神とする国民皆兵制の実施と共に、明治政体の基礎固めが出来たが、真の挙国一致の新日本が全国民に自覚せられたのは、明治廿七八年征清役（一八九四―九五）の国運を賭する対外戦争の経験を通してであった。

2　日本主義

征清役の戦捷に心傲る国民をして「情迫り胸塞り、血涙尽きて言ふこと能は」ざらしめたものは、戦争直後欧州の強大国ロシアがドイツ、フランス両国と連衡して我国に加へた所謂「三国干渉」（一八九五）による遼東還附であって、ここに「臥薪嘗胆」は全国民の合言葉となり、「富国強兵」は国家経綸の根本標語となった。この新たなる全国民的自覚に立脚し之を明確に意識し代表的に立言したものが、当時我国綜合雑誌界の王者としてわが国論に重きをなした博文館発行の雑誌「太陽」の主幹としてその才筆を縦横に揮った若き高山林次郎（一八七一―一九〇二）の「日本主義」であった。彼は羽州鶴岡の出身、福島中学、仙台の二高を経て東京帝国大学哲学科に進み美学を専攻したが、学生時代より文筆活動に入り「帝国文学」（一八九五―一九二〇）を創刊し、二高教授より博文館に転じ、卅二歳にて夭折するまで広く論壇、文界に雄飛して当代の代表的論客、文人と仰がれた。その「日本主義」論に言ふ――

「熟々（つらつら）本邦文化の性質を考へ、宗教及び道徳の歴史的関係を審にし、汎ねく人文開展の原理に徴し、国家の進歩と世界の発達とに於ける殊遍相関の理法を認め、更に本邦建国の精神と国民的性情の特質とに照鑑し、我国家の将来の為に、吾等は茲に日本主義を唱ふ。日本主義とは何ぞや。国民的特性に本づける自主独立の精神に拠りて、建国当初の抱負を発揮せむことを目的とする所の道徳的原理、即ち是れなり。そもそも国家の真正なる発達は国民の自覚心に基かざるべからず。国民の自覚心は国民的特性の客観的認識を得て初めて生起することを得べし。而も是の如き国民的特性は、精覈なる歴史的、はた比較的考察に依るに非ざれば認識することを得べからず。……我邦歴史ありてよりここに二千六百年、中ごろ誤って外来の文化を過重し、国民の性情を蔑視したるより、建国当初の精神は不幸にして十分の発展を見る能はざりき。今や十九世紀人文の高潮に駕し、明治聖代の余沢を享けて、茲に中正なる国民的意識の中に我が日本主義の唱道を見るに至りたるは、我邦文化の史上に於て、一新紀元を劃したるものと謂ふべきなり。」(10)

と宣言し、且つ「現今我邦に於ける一切の宗教を排撃する」旨を述べて、「かの宗教的民族と称するものも、知識の進捗と共に漸く其の迷信を擺脱し、超自然的信仰に代ふるに実践的道徳の原理を以てせむとするは今日世界文化の大勢なり。況してや、我国民は由来宗教的民族にあらざるなり。……吾等は各国々民は其の特質に随うて其の発達の制約を殊にすべきものあるを確信す」と断じて――

「印度欧羅巴民族は、由来宗教的熱情に豊富なるの点に於て世界多く比を見ざる所、形而上学と超自然的宗教とを抱合せる彼等が古神話は、夙に将に来らむとする後代文物の性質を予告せり。若し夫れ宗教が彼等の文学美術より社会的、はた国家的生活の上に及ぼしたる勢力の至大至深なるに至りては、吾等の殆ど想ひ及ばざる所なり。我国民にありては則ち然らず。一篇の古事記、是れ寧ろ歴史なり、神話にあらざるなり。よしや所謂日向人種をして印度亜里安族の為に駆逐せられたるドラビダ人、若しくはドラビダ人と交渉したる或一派のツラン人種なりとするも、韋陀的神話と古事記との比較は、いよいよ明に我が民族的性情の非宗教的同化力の強大を証明するものに非ずや。……浅薄なる厭世思想と冷淡なる形式主義とによりて我が文化の発達を妨害したるの事実を外にせば、仏陀教の努力果して何処にかありとするや。一雙の活眼を開いて上下二千五百年の歴史を通観し来らば、必ずや是の如き非日本的文化の強固なる牽制に対する国民の意識的、はた無意識的反抗を到るところに発見するならむ。……

…基督教の如きも亦然り。宿悪といひ贖罪といひ、霊魂不滅といひ、神の国といふ、その超自然的、また無差別思想は、正に我国民の性情と相反せり。我国民の思想は由来現世的にして超世的にあらず。多少幽界の観念無きにあらずと雖も、之を其の活潑地たる現世的思想に較ぶれば、素より言ふに足らざるのみ。是を以て我国固有の神道は全然現世教なり。かの専ら未来死後を説き、もしくは超絶の世界を恍惚する印度欧羅巴的宗教の比にあらざるなり。」(11)

と、仏・基両教と我国民性とを比較論評し、「国民的性格に一致せざるものは遂に其の完全なる発達を望むべからず」とし、「国家は人類発達の必然なる形式」なるを説き――

「国家は自己の権能によりて、外に対しては一国の独立を全うして其の勢威を皇張し、内に対しては国民の秩序を維持して其の利福を増進せむことを務む。是れ人類発達の須要なる条件なり。……かの人類的情誼の最高標章として認むべき国際公法の如きも、之を執行すべき主権なきを以て、所詮各国民の高尚なる道念に訴ふるの外無きなり。而して是の如き道念は、国家の完全なる統率の下に於てするに非れば、決して其の発達を見るべからざるなり。之を要するに、現実界に於ける一切の活動は、其の国家的たることに於て最も有効なりとす。国家は人生寄托の必然形式にして、又その主上権力なり。」(12)

と、現実的根拠に立って「国家至上主義」を高唱するのであるが、その背景には三国干渉に悲涙を呑まされた全国民共通の自覚が存するのであって、彼自身その心境を「今や極東の雲行き日に益々急、邦を玆に樹つるもの百年の将来を想へば、夜将に眠を成さざらむとす」と告白し「国粋保存主義と日本主義」の関係を論じて、前者が後者の「先駆」たりしことを認めつつ、後者が特に「尚ほ幼稚なる国民思想を根底より揺撼し、国民的意識に最も明白なる覚醒を与へたる」明治廿七八年征清役後の「是の国民の明白なる自覚心を代表せる」ものであることを述べて――

「戦に勝ちたる国民は、世界に於て最も危殆なる位置にあるの国民なることを覚りたり。黄白人種最後の大格闘は、如何に西力東漸千年の歴史を紹ぎて将に絶東の風雲を掀飜せむとするか、黄人種最後の運命を決すべき一大危機の如何に粛々として眉睫の間に近づきつつあるか、日本の戦勝は如何に外邦の猜忌を増し、如何に国民の前途に一層の険巇を加へたるか、戦勝の祝宴に醒めたる国民は悚然として恐れ、猛然として省みたり。是に於て、世界に於ける日本の位置てふ観念は国民の間に最も痛切なる

疑問として提供せられぬ。日本主義は是の疑問に答へむが為に起りたるものなり。」(13)

と言ふ。これを明治廿二年三月三日「日本人」第二三号所載の志賀重昂の結論、「之を要するに、日本民族が前途独立の方針は、実に無形上国粋旨義・大同団結の二項、有形上殖産興業の一項に過ぎず。予輩は期す、日本民族が這般三項を挾んで大に東洋に雄飛し、鵬程九万里、前んで白皙人種と競争し、斯の多年雌伏したる蒙古アルタイ人種を駆りて天を衝くの一大運動を作為せんことを」の言葉と連ね合すとき、そこに維新の微言「尊王攘夷」の余響を再び聞く思がする。事実、志賀重昂は明治卅七八年征露役に従軍して「大役小志」の一書を遺して居る。

3　しきしまのみち

高山林次郎は「現今我邦に於ける一切の宗教を排撃する」と宣言して我国論壇の表面に華々しく活躍したが、また一方には「国教は国の精神なり。我国の精神は神儒仏の三道なり」と「三道並行論」を宣言して「日常天下に雌伏して忠君愛国の精神を国家の裏面に養ひ成し」た大日本国教大道社の川合清丸（一八四八―一九一七）の如きがあって、その社員の一人に征露役首山堡の激戦に壮烈軍神の名を留めた陸軍歩兵中佐橘周太ありしことをここに注意しておかう。この西力東漸の歴史の波を巻返し欧州の天地に動乱の口火を点じた曠古の大戦に従軍して「身をすてて御国のためにつくすべきであった」のに、「この時に生きながらへしめられたわが身はなきものと思って御国のためにつくさうとする志」を立てた一青年があった。その名は三井甲之助（一八八三―一九五三）、甲府市の西郊竜王駅の山県神社に程近い農村松島村々長の長子として生れ、一高を経て東大国文科に学んだ彼は、正岡子規没後の根岸短歌会に入り「正岡先生三年忌歌会」を始めとして連作短歌の制作に励み、同時に近角常観師の求道学舎に親鸞の言葉を学んだ。

明治四十年（一九〇七）「万葉集論」を卒論として学窓を出で母校の私立中学を教ふると共に、翌年には伊藤左千夫の「馬酔木」の後をうけて文芸雑誌「アカネ」を創刊、その経営に従事する傍ら、雑誌「日本及日本人」歌欄の選者として竹の里人の後をついで毎号歌壇文界のみならず広く思想界に亘る時論の筆を執った。時正に戦後の国民精神のゆるびと共に時代の急流は大正デモクラシーに向って傾斜しゆかむとするに当り、「帝国文学」への寄稿、「樗牛全集から」の編著に先人の足跡を顧みつつ、彼は「名も無き民の確信」に立って「親鸞を生みし日本の世界史的使命」を説いた。作歌に念仏の行を結び、無碍光仏のみ光を祖国日本に仰いで、世界の各地、また内地の国々島々に祖国のいのちをまきひろぐる「日本語を話す日本人」を遍く「御同朋御同行」とたっとんで、等しく「祖国礼拝」の無碍の一道に帰入せむとするのである。

彼は言ふ――「われらが『日本人』であるといふことはわれらの生命の性質である」[14]と。また言ふ――「日本主義とは人生原理である。……人生原理を現実的の見地から確立しようとすれば、日本人にとっては人生主義、人道主義は直ちに日本主義となる」[15]と。そして――

「今日の流行思想としての偽新思想は非日本主義、非現実主義の空想から出発して居るものである。彼等がインターナショナリズム、又はコズモポリタニズムを信奉するかに装ふのは、それが非現実的、非日本的の空想から出発するからである。そして日本主義は……此の非現実的、非日本的精神を打破することによってその真精神を発揮し得る……日本主義は永久の動乱に随順して無極の開展を生成せしめようとする悲痛の努力の相続であって、固定の形式と地位とに安住しようとする老朽夢想の安逸を排斥する」[16]

といふ立場から「永久思想戦」を宣言して、「国際現勢に於ける日本」の現実的原理に立って、世の俗論としての流行思想に緻密の分析と容赦なき批判を加へた。彼は「ゲーテの後にヴント」と唱へ、ゲーテの芸術とヴントの学術とを併せて心理主義の見地から文献文化史的批判をカント末派の論理主義に低迷する時代思潮に加へ、「世界文化単位

日本」の信を高唱したのである。

大正十一年（一九二二）「明治天皇御集」が宮内省より発表せらるるや、彼は深くその研鑽に心を潜め、翌年十二月「祖国礼拝国民宗教経典明治天皇御集拝誦宣言」をその主宰する人生と表現社から発表した。その中にいふ――

「われらは信ず、われらはわれらの祖国日本を礼拝すべしと。われらは信ず、祖国日本の精神はかしこくも明治天皇の大御心にすべをさめしめられたりと。われらは信ず、明治天皇の大御心は『明治天皇御集』に表現せさせられたりと。かしこくもわれら日本国民は『明治天皇御集』を拝誦しつつ、明治天皇の大御言をさながらにいただきまつるのである」[17]

と。彼はこの「しきしまのみち」の開拓宣明を己が承命の任として丹誠を尽し終生渝ることがなかった。

（註）

（1）「梧陰存稿」（1895）巻一　19頁
（2）同書22頁
（3）「日本書紀」巻第廿二、豊御食炊屋姫天皇（推古天皇）十五年の項
（4）雑誌「日本人」第二号（1888）（「志賀重昂全集」第一巻1―2頁）
（5）同右（同書3―5頁）
（6）同右（同書6―7頁）
（7）雑誌「国光」第一号（1889）（「国光余影」24―42頁）
（8）小池松次「教育勅語絵巻物語」（1971）36頁図版
（9）徳富猪一郎「元田先生進講録」（1934）増補普及版3―4頁
（10）高山林次郎「樗牛全集」増補縮刷版（1915）第四巻283―284頁
（11）同書285―288頁
（12）同書290―291頁
（13）同書378頁
（14）蓑田胸喜「学術維新原理日本」（1933）上巻序1頁

(15) 「三井甲之存稿」(1969) 413—415頁
(16) 同書417—418頁
(17) 三井甲之「明治天皇御集研究」(1928) 序論2頁